

真理通信

第 78 号 平成 24 年(2012 年)3 月 1 日発行

巻頭

おのれの心を まもり
はげみを たのしみとすべし
淤泥(どろ)に溺れたる 象のごとく
難処(なやみ)より おのれを 救い出
だすべし (法句經 327)

◇新：法句經講義 36◇

<※「新・法句經講義」は、巻頭ページ掲載の法句經について解説しています。>

東日本の大震災以来、「日本がんばれ」の声は高いものの、何か沈んだ雰囲気、国をおおっているような気がします。道路や建物は復興しても、人々の心を復興させるのは、なかなか難しいことです。

法句經はここで、「おのれの心をまもり、はげみを樂しみとすべし」と言っています。今、「絆」と盛んに言われますが、家族や周辺の人々との関係を大切にすることで、「自分(おのれ)の心」を守ろうとしているように思います。そのうえで、「はげみ」を樂しみとしようと言うのです。

家族や肉親を失った時、深い悲しみに落ち込んだ時、泣き嘆き悲しむだけではどうしようもない時があります。そうした時、案外、仕事や家事にはげむ方が、心が落ちつくことがあります。

泥に落ち込んで、もがき苦しむ象の姿を、お釈迦様もご覧になったに違いありません。その象のように、自分で自分を救い出すよりほかない時もあるのです。そうした必死の努力は、いずれ自分自身に大きな力を与えてくれます。日本も、今そんな時間を過ごしているのかも知れません。

仏教豆知識 56

仏壇

仏壇(ぶつだん)は、仏様をまつる棚のこと。最近では仏壇のない家庭も多いようですがご庁の家には、座敷の奥に大きな仏壇が作られていたものです。仏壇のある部屋を「仏間」と言いました。それを見て、ある外国の宗教学者は「日本の家庭には、それぞれ小さな教会がある」と感心したそうです。お寺の本堂などの

仏壇は、須弥壇(しゅみだん)と言います。

世界の中心にある山、「須弥山(しゅみせん)」を模したものです。大きなものでなくても、家庭のなかに中心になる場所があることは大切なことです。居間などの棚に、小さな仏様や写真を飾ることで、家族のつながりも一層深まるように思います。

< 主管所感 >

「安心」をつくり出す社会

友松浩志

東日本大震災から一年、徐々に復興していく被災地ですが、人々の心の傷が癒えるのはまだまだ先のこと。東日本全体でも、相変わらず余震のような地震があちこちでおこり、不安な気持ちはまだ消えそうにありません。

「不安な気持ち」の反対は「安心」、やすらかな気持ちです。この「安」という字は、女の人がある家のなかにいる姿を表しています。学校から帰って、「ただいま」と言った時、

「お帰り」と母が答えてくれた時のうれしさは、今でも覚えています。事務仕事を持っていた母は、昼間の時間あまり家にいませんでした。家に帰って、シンとした室内でひとり遊ぶことが多かった私は、母がいればそれだけで、家のなかが見え、明るく感じたものです。それは、誰でも、どんな子でもそうなのだと思います。

今、日本の子育ては大きな岐路にたっています。政府は「子育て新システム」と言って全国の幼稚園・保育園すべてで、長時間保育を行なう方針を打ち出しています。その理由は、女性の社会進出にともなう「待機児」の増加です。少子高齢化社会で、労働力が足りないから、もっと女性に社会に出て働いてもらいたい。その間、子どもは施設でお預かりしますというシステムです。でも、それですべての家庭が、女性が、子どもたちが幸せになるのでしょうか。

確かに、近年の不況で家庭の収入は減っています。夫婦で働けば、収入は増えるに違いありません。でも、そこで増える収入より保育施設で使われる子どもひとりあたりの経費の方がはるかに高額です。その矛盾はどうなるのでしょうか。

もちろん、子育ては女性だけの仕事ではありません。私の母も、家事以外の仕事をする喜びを持っていました。そうした仕事と、女性にしかできない子育てが両立するシステムこそ作られなければならないと思います。子育ての喜びを感じながら、「安心」をつくり出していける社会、それこそが今求められていると思います。

真理通信

第 79 号 平成 24 年(2012 年)7 月 1 日発行

巻頭

花びらと色と香を そこなわず

ただ蜜味(あじ)のみをたずさえて

かの蜂のとび去るごとく 人々の住む村落(むら)に

かく牟尼(ひじり)は歩めかし (法句經 49)

◇新：法句經講義 37◇

＜※「新・法句經講義」は、巻頭ページ掲載の法句經について解説しています。＞

蜂や蝶が、蜜を集めに花々を巡っていきます。蜜を吸われても、花々には何の変化も見られません。それどころか、そうして蜂や蝶に蜜を吸われることで、花々は受粉という、自分たちの生命をつなぐ最も大切な恩恵を受け取っています。

僧侶たちは村々を巡り、旅を続けていきます。これを行脚(あんぎや)と言いますが、お釈迦様の教えを広げるための大切な旅です。布教の旅ですから、良いことばかりではありません。時には拒絶され、石を投げつけられることもあったかも知れません。それでも淡々と旅を続けていったのです。村の人々から何も奪わず、何事もなかったかのように過ぎ去っていく、そんな僧侶たちの姿が目に見えられます。

禅宗では、修行僧のことを雲水(うんすい)と言いますが、これは「行雲流水」という言葉の略です。行く雲、流れる水のように一か所に留まることなく、修行の旅を続けていく姿を表しています。仏教の原型に戻ろうとした、禅宗の気風が感じられる言葉です。旅の途中、どんなにつらいことがあっても負けずに旅を続けていく、そのことで、お釈迦様とその弟子たちに一歩でも近づこうとしたのです。

仏教豆知識 57

塔

塔(とう)は、インドの古語の stiipa(卒塔婆)、thii va(塔婆)から生まれた言葉で、英語の tower も同じ語源を持つと言われます。もとは、遺骸を埋葬して土を盛り上げた「塚」のようなものを指した言葉です。仏教における塔は、お釈迦様が亡くなられた後、その遺骨を 8 つに分けて各地に持ち帰り、それを中心

に埋めて 8 つの塔が建てられたのが始まりです。その塔が信仰の対象となり、しだいに規模が大きくなって、石造りの立派なものがつくられていきました。それが中国に伝わり、寺院建築の中心になっていきます。塔の高さも高くなり(多層塔)、日本の五重の塔などの原型になります。それは、現在の東京スカイツリー等の起源にもつながるものです。

< 主管所感 >

旅の恥はかき捨て?

友松浩志

歩行者天国が復活して、神田寺のある秋葉原は、また「観光地」として完全復活(?)した感があります。「観光地」ですから、日本全国から人が来ます。日本どころか、外国人の数も相当なものです。いったい「観光客」が、何をしに秋葉原に来るのかは、私にはまったく不明ですが、その後始末はかなり大変です。ともかく、すごいゴミを残していくのです。「旅の恥はかき捨て」という言葉があります。旅人は、その土地に知っている人もないし、多少恥をかくようなことをしても、すぐ忘れられてしまうから気にすることはない、といった意味でしょうか。私に言わせれば、「旅のゴミは投げ捨て」ではないかと疑いたくなります。

旅をしていると、確かに気がゆるむことがあります。私にも大失態の記憶があります。ある山登りの帰り、列車の中でのことです。午後の上り列車は、かなり混んでいました。とはいえ、私と友人は、うまい具合に 4 人がけの座席の向かい合わせに座ることができました。そして、東京までの 3 時間余り、私とその友人は延々と積もる話をしゃべり続けたのです。東京が近づき、そろそろ降りる準備をする頃になって、やはり隣で向かい合わせに座っていた 2 人づれが、小さな声で「ほんとにもう、うんざりしちやったな」と言ったのです。私は、ギクリとしました。この 3 時間、私たちは隣で静かに座っている人を、まったく気にせずしゃべり続けていたのです。

人は生きつづける限り、恥を重ねていくものだと言った人がいます。人は完全ではないから、失敗・失態はあって当然かも知れません。でもやはり、それは気のゆるみから生じることも確かです。自分の家の前にはけしてゴミを捨てない人が、旅先ではこっそりゴミを捨てるのです。円高のせいか、格安の旅の案内があちこちで目にとまります。それぞれの土地には、それぞれの暮らしがあることを、隣の席には、隣の人の目も耳もあることを忘れたくないものです。

真理通信

第 80 号 平成 24 年 (2012 年)12 月 1 日発行

巻頭

比丘(びく)の 口をよく制(ととの)え

言うところ 賢(けん)にして 寂(じゃく)

義(よし)と法(のり)とを示さんに

彼の説くところ 甘美なり (法句經 363)

◇新：法句經講義 38◇

<※「新・法句經講義」は、巻頭ページ掲載の法句經について解説しています。>

選挙では、テレビや新聞などで本当に多くの言葉が飛び交いました。やはり、選挙というのは「話し」の上手な人が有利なようで、どんなに優れた人も、言葉に負けると劣勢に立たされます。アメリカの大統領選挙での公開討論は、まさにその典型のようです。

ここに掲げた法句經では、逆に口／言葉を抑制して、「言うところ賢にして寂」つまり、ズバリ言うべきことは言うが、後は黙っていることが理想とされています。テレビ討論で、相手の言葉をさげぎってでも自分の主張を大声でまくし立てる人がいますが、あれはいただけないということでしょう。

そして何よりも、何を言うかが問題です。「義と法を示す」というのは、真実の道理を明らかにする—ということ。どんなに弁舌が上手でも、嘘があったり、間違ったことを言っていたのでは始まりません。とかく私たちは上手な話しにだまされます。振り込めサギの電話ではありませんが、話しのうまさに乗ってしまうのです。言葉の真実を見きわめることの難しさ、今度の選挙でもつくづくそれを感じさせられました。

仏教豆知識 58

一向

一向(いっこう)というと、「一向に景気がよくなる」とか「一向に構いません」とか日常によく使う言葉です。「全然～ない」とか「全く～」という意味ですが、仏教では、「ひたすら」とか「一途に」といった意味で使います。

「一向一揆」(いっこういっき)というのは、戦国時代に浄土真宗の信者が起こした一揆のことです。浄土真宗は、ひたすらに念仏する宗旨ということで、当時「一向宗」と呼ばれていました。ひたすら念仏す

る一途な信仰心は、時に過激な行動となり、当時の武上達にも恐れられたのです。

< 主管所感 >

数の不思議を楽しむ

友松浩志

師走になり、今年も年内に法事をすませておこうという方が多くおられて、土日は法事に追われました。法事は、三・七の年に行ないます。三回忌、七回忌、十三回忌、十七回忌といった具合です。亡くなった後は、七日ごとに初七日、二七日(ふたなのか)と行ない、七七日(しちしちにちななぬか)／四十九日(しじゅうくにち)で締めくくります。

私が十八歳のとき、初めて一人で法事を任されて、あるお宅に伺った時、檀家の方から「なぜ七日ごとに法事をするんですか？」と質問されて、立ち往生したことがあります。なぜ「七」が大事なのか。後日ある先生に質問すると、早速答えが返ってきました。

まず、インドは 0 を発見した 10 進法の国である。10 進法で考えると、1 から 10 の間で、どの数の倍数でもなく約数にもならないのが 7 である。そこから 7 は、神秘的な数とされ西洋では 1 週間が 7 日になり、ラッキー 7 などになったし、東洋では七夕や七七日になった、と解説して下さいました。東洋では、基本的に奇数は不安定な数と考え、七五三などは、その不安定な歳を無事に乗り越えるための儀式と言えます。

数年前「博士の愛した数式」(小川洋子著)という本が話題になりましたが、この本は数の不思議を小説にした珍しい本です。例えば「28 は完全数」という話が出てきます。28 の約数は 1 と 2 と 4 と 7 と 14。その約数を足すと、28 そのものになる。それが完全数。そういう完全数は、6、28 の次は 496、その次は 8128 までない。そのうえ、28 は $1+2+3+4+5+6+7=28$ と言われると、なるほどな—と関心させられます。

私の誕生日は 14 日。亡くなった母も 14 日。その上、家内も 14 日生まれとなると、何かの因縁を感じます。といて、数にあまりにとらわれるのも問題です。先々代圓諦老師は、「日に吉凶なし」とよく言われました。吉凶にクヨクヨするより、生きること不思議さ面白さを感じながら、楽しく過ごす方がずっとよいように思います。例えば、なぜ AKB は 48 なのか。どうでもいいことかも知れませんが。